

「21 世紀のリベラル・アーツ教育とグローバリゼーション」
デイビット・ケネット ヴァッサー大学教授講演 2008 年 10 月 7 日

講演の内容についてはお手元の資料を準備してまいりましたが、この講演を始めるに先立って申しあげたいことは、21 世紀のリベラル・アーツ教育で欠かせない条件として、学生が教師に質問する能力というものがございます。もちろん本日ご参加の皆様はすばらしいかたがたですが、私の講演を聞いてくださる学生でもあるわけですので、どうか講演の途中であってもご不明な点、反対のご意見などがございましたら、質問していただければ幸いです。

私の教育の背景

本日のテーマに入る前にまず私の受けました教育(education)についてお話させていただくことは皆様のお役に立つかと存じます。その理由は私の受けた教育についてお話しましたら、良い教育とは何かということについて予め考えておくことと、適切な方針を提言することに有益と思われるからです。

私はイギリスで育ちました。イギリスではアメリカ合衆国よりも早い時期に学問的な専門性に重きをおく環境になっておりました。私は幅広い教育をうけており、16 歳までは広範囲の分野の教育を受けました。16 歳には 9 科目に絞られた national examination を受けました。

当時のイギリスの制度では基本的には人文学と科学の分野のなかから選択した、より狭められたカリキュラムに集中することが求められていました。私は多少心配でしたが科学を選択しました。私の最も得意な科目は歴史と文学でありましたが、将来の職業のことも考えて 2 年間は数学、物理、化学と一般教養科目をとりました。一般教養科目とは大変広範囲な分野にわたり、たとえば文学、演劇、哲学、歴史、公民などを含んでいます。ここで触れておく必要がありますがこれらの一般教養科目は一般教養科目を教えるように訓練された教員によって教えられるのではなく、その分野の専門の教員が交代で教えていました。

次の 2 年間で私は将来、科学の分野で仕事をするという考えが難しいと思うようになりました。実際、私の成績は科学よりも一般教養科目のほうがずっとよい結果となりました。17 歳になって経済学のコースを選びました。当時私は経済学がどのような学問なのかほとんどわからず選択しましたが、今思えばこれは幸運な選択でした。数学や科学のある部分は経済学に大変役に立ちましたし、初期に集中的に学んだ広範な歴史学と地理学も大変有益でした。それからサセックス大学に入りました。当時、サセックス大学は新しく設立された大学で「伝統的な教育の地図を描きなおす(“redraw the map of education”）」という因習打破の使命感にもえていて、予算も豊かにもっていました。この大学の因習打破という考え方の特徴は、これまであった伝統的な学部とともに、これまで“schools of study”のなかにあった教育(instruction)と研究(research)も廃止するという点でした。私は社会学派(the School of Social Studies)に属していましたが、経

経済学を選んだ学生と教員はヨーロッパ研究、イギリス・アメリカ研究、アフリカ・アジア研究、そして教育研究(Educational Studies)に散らばっておりました。

サセックス大学で私が受けた教育は、40年過ぎた今日でも非常にすばらしいものであると思います。しかしこのために犠牲にしたものもありました。つまり純粋に経済学のコースにおいては経済学の学生たちと少ない時間しか過ごしていかなくて、それより長い時間を心理学者、哲学者、地理学者、社会学者、文学者と過ごしたということがあります。そのコースは経済学者だけではなく広い分野の学生たちを対象に作られていました。例えば、ほとんどの大学でマイクロ・マクロ経済学入門(Introductory Micro and Macro-economics)として教えられるものは、サセックス大学では「経済・社会的枠組み(“The Economic and Social Framework”)」という名のより広い科目に組み込まれていました。私たちのコースの統計学は数学・物理学科(the School of Mathematical and Physical Sciences)の数学者によって教えられていたので、当時も今も経済学部では当然教えられる回帰モデルについては詳しくは学んでいません。私は他の大学の経済学部の学生よりも学際的な教科に時間をかけ、とくに重要なことですが、他の学問分野の用語で表現することを学びました。この構造的な学際性は強い魅力を持っていて、その効果は現在も継続しています。そして多くは有効な影響力を私にもたらしています。

念のため付け加えると、サセックス大学の「伝統的な教育の地図を描きなおす」という試みはほとんど成功しませんでした。それまであった学部はしっかり根をおろしているように見えていました。もともと専門分野の同僚たちは「教科グループ(“subject group”)」の保護のもとに集まりました。その保護は徐々に強くなっていました。経済学の分野に限らず、研究費用を集めるために、大学院課程では強い専門性が求められていました。そしてサセックス大学の壮大な学際の実験は学部の復活とともに、次第に消えていきました。

私は1972年にニューヨーク市のコロンビア大学で勉強するための奨学金を受けることができました。当時はコロンビア大学の新しいクラスメートたちはほとんどアメリカのリベラル・アーツ教育体制で教育された経済学の院生でした。そして私の受けたイギリスでの学問の訓練の深さはおそらくアメリカの学生たちと同等でありました。当時のこのような状況は今日では見られないでしょう。今日では最も優秀なリベラル・アーツの経済学の学生でも入学許可を得ることは大変困難になっています。大学院生のほとんどは、今日は経済学専攻学生でもなくアメリカ人でもありません。コロンビア大学の教育はゆるやかでありましたが目的ははっきりとした教育でした。

三年間の奨学金を受けた後、コロンビア大学での経済的な基盤がなくなったので私はNYCから2時間のところに位置するヴァッサー大学に職を得ました。

ヴァッサー大学の歴史

私が現在教鞭をとっていますヴァッサー大学についてお話します。ヴァッサー大学は 1861 年にイギリスからの移民のマシュー・ヴァッサーによって創立されました。彼はビールの醸造産業で富を築いた人です。晩年彼自身と彼が生涯の住処とした町に対して、不滅の記念物を何かの形で残したいと考えていました。彼はもともとエジプトのギザにあるピラミッドのレプリカをポキプシーの町を流れるハドソン川の堤に建設したいと思っていました。しかし、信仰心の厚い、ヴァッサー氏のアドバイザーが女性のための大学を創ってはどうかと薦めてヴァッサー氏を説得したのです。そのアドバイザーは、これから創る大学において、リベラル・アーツは今ではりっぱになったコロンビア大学、イエール大学、ハーバード大学やプリンストン大学のような男性の大学に匹敵する教育であるべきだと主張しました。今日のアメリカの大学とカレッジのちがいは博士号を授与できるかどうかの点にあります。アメリカ合衆国のカレッジ(college)はイギリスのオックスフォードやケンブリッジ・カレッジと異なっていて、学部生のための教育機関であります。大きな大学では学部のまともりも、コロンビア・カレッジというように、カレッジと呼ばれていますが、アメリカではカレッジはそれだけでも独立した機関です。

マシュー・ヴァッサーの「偉大な企業(“magnificent enterprise”）」であるヴァッサー大学は「ピラミッドより永続する(“more lasting than the peramids”）」という、彼の望んだ遺産になるかもしれません。しかし彼の意思を現実のものにするかどうかは今後のヴァッサー大学を見ていかなければならないでしょう。

ヴァッサー大学の初期のころのカリキュラムは男性の入る大学のものに添っていました。初期の学生たちはキャリア・ウーマン志向ではなく、将来は妻や母親になるべく入学してきた富裕な家族の子女でした。専任教員の中には当時は性差別のために主要な大学に雇用されなかった指導的な女性思想家たちがいました。たとえば天文学の教授であったマリア・ミッチェルはアメリカ科学アカデミーの最初の女性会員でありました。私の教えている学部である経済学部にも、優れた女性がたくさんいます。さらにヴァッサー大学は優秀な卒業生を輩出しています。その中でもグレース・ホッパーはアメリカ海軍の提督にまでのぼりつめた、コンピュータ・サイエンスのパイオニアの 1 人でもあります。

1950 年代までにはより多くの女性たちがキャリアを求めるようになり、カリキュラムの厳しさが増加しました。しかし 1960 年代は女子大学には試練の年でした。つまり伝統的に男性しか入学を認めていなかった主要大学が女子学生を受け入れるようになり、ヴァッサー大学やスミス大学、マウント・ホリヨーク、ラドクリフ、バーナード、プリンマー、ウェズレー(セブン・シスターズと呼ばれる 7 大女子大学)に入る予定であった学生がハーバード、イエール、コロンビア、プリンストンや他の主要な大学に入学できるようになりました。われわれの現在の学長であるキャサリン・ヒルはウィリアム大学の最初の女性の卒業生です。ウィリアム大学は 1793 年に創立され、それまでは男性だけの大学で広く尊敬を集めていました。

セブン・シスターズは変化する世界で生き残るためにそれぞれが違う道を選択しました。ラドクリフ大学はハーバードに吸収され、姿を消しました。マウント・ホリヨーク大学とプリンマー大学は少なくとも学部生までは女子大学ということで存続しました。ヴァッサー大学はイエール大学との合併を考えた時期もありましたが、結局、卒業生と専任教師の強い圧力のために独立して存続することを選びました。ただし 1974 年から男性の入学を認めることにしました。それ以来ヴァッサー大学は男女共学ですが、女子学生の方が男子学生よりも多くなっています。しかしこれは珍しいことではなく、例えばイエール大学の学部生数は女子が男子を上回っています。

私は 1976 年、つまり男女共学(“co-education”)になったばかりのころにヴァッサー大学に赴任してまいりました。その時私は「リベラル・アーツ(“liberal arts”）」とは成熟したアメリカの感覚を持ったことばである、という漠然とした考えしか持っていませんでした。私は幸運にも当初からヴァッサー大学とリベラル・アーツという考え方をすっかり気に入ってしまいました。イギリスの学部の当初に受けた専門的な教育は偉大なものでしたが、私自身のイギリスでの学部時代に受けた教育とアメリカのリベラル・アーツは大変に共通しているものがありました。後になって以下のような結論に達したのですが、成功すればアメリカのリベラル・アーツ教育は現在受けることができる教育の中で最高であり、未来に向けて最も希望の持てるものであります。

ヴァッサー大学には今日およそ 2,450 名の学部生がおり、290 名の専任教員と、拡大し続けている運営陣があり、教員 1 名あたりの学生数は 9 名です。28 の学部があり 13 の多領域プログラムと 6 つの学際プログラムがあります。ヴァッサー大学では 50 の異なった科目を専攻することができます。

皆様のうちでご関心のあるかたはすでにヴァッサー大学のホームページで学費を調べられたかもしれません。年間 40,000 ドルと寮費の 8,000 ドルという数字を天文学的と思われたかもしれません。日本円に換算すると合計、年間 500 万円にもなるからです。学生はこのような費用をどのようにして捻出するのかというのはいいい質問です。

第一に大学は学費を助成する立場にあります。学生の奨学金の合計は年間約 40,000,000 ドルですので、日本円で 40 億円となります。全く学資を払わないですむ学生もいますし、奨学金をわずかだけもらう学生もいます。60%の学生が奨学金を受けています。支給は必要に応じて行われます。つまり入学時に家族が提出した経済状況に関する情報に基づいた奨学金プランを学生に提示します。経済学ではこれを価格の差別化といいます。学生が支払う学費は学生の支払い能力に基づいて決まるということです。別の大学に勤める同僚はリベラル・アーツの大学について「ある部分は教会で、ある部分は中古車販売特約店だね」と言っています。つまりわれわれは良い行いをしようと努力しますが、人によって違う価格(学費)を提示するというこ

とです。

学生に対する援助の資金はどこからくと思われますか？ 大学に関わりをもっているようにとわれわれが薦めた卒業生たちが大部分は寄付してくれています。卒業生からの寄付 (“endowment”)は8億ドルにもなり、現在の学生1名あたり約250,000ドルにあたります。この金額は大変多いように皆さんには思われるでしょうが、実際は、ヴァッサー大学は大変貧しい大学なのです。ウェズレー大学はヒラリー・クリントンが卒業した大学ですが、われわれの2倍の資金を持っています。スワースモア大学は3倍、アイオワのグリネル大学は学生1名につき100万ドルの資金があります。有名な大学はさらに豊かで、ハーバード大学は400億ドルの寄付金があります。

さらに政府の助成金プログラムと学生の家族に対する低金利のローンがあります。アメリカでは子どもを持つ人々にとって大学の学費を出すことは重荷となっていることは知られていることです。子どもがまだ小さい時から備えられていて、時には親からではなく祖父母から提供されることもあります。

ヴァッサー大学の話を終える前に卒業生について少しお話します。36,000人の卒業生たちは芸術と科学のあらゆる分野に及んでいます。たとえばアメリカ合衆国の栄誉ある詩人のエリザベス・ビショップ、作家のメアリー・マッカーシーやジェーン・シルレイ、エドナ・セント・ビンセント・ミレーがいます。下院議員のリック・ラチオ、女優ではメル・ストリープ、芸術家のナンシー・グレイブがいます。卒業前にキャリアをみつけて中途退学したジャックリー・ケネディやジェーン・フォンダ、アン・ハザウェー、ワシントンポスト社のカティ・グラハムがいます。それほど有名ではないけれども幸運なことにビジネスや法律の政界で成功した豊かな卒業生たちが大学に経済的支援をしてくれています。

リベラル・アーツのカリキュラム

「リベラル (“liberal”）」という言葉は英語の中で最も混乱した意味に使われている単語の一つです。現在のアメリカでは「リベラル」とは政治の中では左よりの人という意味です。19世紀のイギリスではイデオロギー的に政府の介入に反対し、自由貿易を好む人たちを意味しました。

今日のイギリスでは政治的な意味では中間派に属している人のことを指しています。また「リベラル」とは、たっぷりしている、という意味もあります。しかしこのような様々な意味のどれもリベラル・アーツに関するリベラルという言葉の語源と結びついていないのです。英語のリベラルの語源はラテン語の「自由」なのですが、「自由人 (“free men”）」に与える教育というのがもともとの意味でした。それは商売や職業について学ばなければならない人々に対抗しての教育 (education)でありました。

初め、シラバスは7つのアーツ(“arts”)から成り立っていました。中世における大学の3教科(the trivium)は文法、修辞学、論理学で、4教科(the quadrivium)は幾何学、算術、音楽、天文学でした。

しかし今やこのような分類は時代遅れになっています。近代の大学ではリベラル・アーツは美術、文学、言語、哲学、歴史、数学、科学の領域を含んでいます。リベラル・アーツ教育の理論のエッセンスは、すべての学生がこのような領域の学問に触れなければならないというものであります。しかしながらこのような学問に触れることを必修とすべきか学生の選択にするのかは重要な問題です。

世界の他の国の高等教育機関とは異なって、アメリカでは18歳になったとき学生は選択した学位プログラムを持たないまま大学に入学を許可されます。よくアドバイスをうけ、1年目は様々な科目を履修することができます。そうすることで、それまで学んだことのない教科や高校でうまく教えられていなかった教科の勉強ができます。この最初の1年間で学生は自分の適性を発見し、専攻科目に導かれるようになるのです。もっとも、専攻科目にはわずかの時間しかかけられません。ヴァッサー大学ではそれぞれの学生は最低34の異なるコースを履修しなければならないのです。ほとんどの学生は36コースをとっています。1.5倍以上は専門科目を履修出来ないことになっています。専門科目コースの最低履修数は11です。ほとんどの学生は専門科目のなかの12から13のコースを履修しています。

必修の割合に関しては、少なくとも25%の科目は専門科目以外でとらなければいけません。ヴァッサー大学には4つ学部があり、科学部、人文学部、社会科学部、語学部があります。経済学は社会科学部にあります。経済学専攻の学生は経済学以外で24の科目をとりますが、そのうち12科目は社会科学のなかから、あとの科目は他の学部の科目をとらなければなりません。

リベラル・アーツ教育はキャリアを見つけるための投資であり、また人生の喜びを感じる練習のための消費でもあります。わが大学では美術、音楽、演劇の科目を経済学部専攻の学生も取ります。そのような科目を履修することで経済学専攻の学生も人生を楽しむ準備をすることができるからです。

リベラル・アーツを取り入れた大学には学生のためのほとんどの科目が構造化されていないという性質があるとしたら、学問に関する助言は重要なものです。そのため各学生には専任教師のアドバイザーが入学時に付けられます。学生の興味に関心を定めていき、1年目に学生の興味にこたえる学習指導をすることはアドバイザーの仕事です。そして可能であれば学生を新しい関心の分野に引き出すことも仕事のうちです。教育(education)という言葉はラテン語を起源にしていますが、文字通りの意味は外へ導き出すということです。イタリア・ルネッサンスの有名

な彫刻家であるミケランジェロは大理石の塊の中にすでに完成した彫刻は存在していると信じていて、彼の仕事は彫刻を大理石から出してやることであると信じていました。ミケランジェロのことばは教育の過程をどのようにみるのかという完璧な比喩だと私は思います。つまりもっとも先の見えない学生の心の中にさえ潜在している、美しいものを見つけるという結果となると思うのです。

私が経済学者なので、学生は私のところへやってきてお金儲けをするにはどうしたらよいかとよく質問します。私は学生に次のように言うように努めています。「情熱を持てるものを見つけなさい、そして仕事を見つけ、喜びを見つけなさい。もしほんとうにそういうものを見つければ、お金はついてきますよ」とね。

リベラル・アーツの教授方法

コースのカリキュラムと配分が重要ではありますが、その一方で“エリート”のリベラル・アーツの大学は教員と学生の関係と教授方法の点に特徴があります。ヴァッサー大学は学生がキャンパスに住むようになった最初の学校であり、また最も多くの学生が宿舎に寄宿している大学です。学生の 98%はキャンパスに住んでいて専任教員のほとんどが大学所有のアパートや大学構内に建てられた家に住んでいます。専任教員の約 15 名は実際に大学の中に学生と住んでいて学生の指導にあたっています。教育の過程は朝の機知にあふれた話から晩までにいたるまったく 1 日中で行われる出来事です。さらに夜には、客員教授や外部の芸術家たちの講義やセミナーがあって教育は補強されています。

1 クラスの大きさは概して小さく、ヴァッサー大学では平均 17 名です。受講の許可認定は特定の学位プログラムをめざしているかでは決めていないため、学生が関心事を変えることがあると受講者数のバランスの点で問題が生じることがあります。たとえば経済学は専攻科目として人気が高まってきており、受講者数が平均 24 名に増えてきている一方で、英文学は履修登録学生数が減っていてクラスの規模は縮小してきています。

最終的には、学部のサイズの変更もなされるかもしれませんが。しかし専任教員は 7 年勤務すると終身地位保証を得ることができますので仕事が大変少なくなったとしても解雇されることはありません。定まった退職年齢がありませんので退職することを教員に求めることもできないのです。だから学部を変えるというのは遠洋定期船をこぐようなものです。つまり氷河にぶつからないように前を良く見ていなければならないからです。

学生に対するアドバイス制度や比較的小きなクラス、大学内に居住していることなどから、学生と教員の関係は近いものであります。教育は講義のみでなされるものではなく、むしろ 20 人くらいの小さなクラスや 12 から 13 名でテーブルを囲むセミナーでなされるものです。いずれの形

式にしても学生との交流は大体、ソクラテス的な問答方法をとります。つまり学生に質問させるようにすることであり、こちらから答えを与えるものではありません。絶え間なく質問をすることで、学生たちが問いたいという気持ちをもつように努力しております。学生たちは授業に先立って文献を読んでおくことが義務付けられています。

学生は教師から文献の内容を問われるだけではなく、その文献に対する疑問や解釈についても答えられることが期待されています。学生の意見をほめることは大変重要です。ただし科目によってある程度の違いがあるでしょう。数学や科学では正解と不正解があり、また教材によっては講義形式のほうが適しているものもあります。しかし、不可能ではない刺激的な考え方や、刺激的で建設的な反対意見は重要です。

リベラル・アーツの大学にいる学生が時々「私は何をするために訓練されているのだろうか。この勉強が私にふさわしいキャリアとどう結びつくのだろうか」と疑問を投げかけることがあります。特に海外からやってきたり、経済的に不利な環境で育った学生がこのような疑問を持つことがあります。そのような出身の学生は、キャリアが必要だと感じているからです。われわれの大学の学生のうち 8%は留学生で、その数は増え続けています。かなりの援助を得ている留学生がいますが、国内の学生に対して行っている差別をしない方針(blind policy)の必要性に関しては、留学生については修正がなされています。そうしなければ、たいへん有能であるが比較的貧しいインド、中国、東ヨーロッパの学生に大半を占められてしまいます。われわれの学生の 26%は人種的に少数民族の出身です。これらの学生はキャリアが必要だと感じていて、一般教養的ではない専門的な学問を求める制度を使って入学してきています。アメリカの制度的において専門的教育は、法科大学院(law school)、経営学大学院(business school)、医学大学院(medical school)、公共政策大学院(schools of public policy)といった大学院でなされており、学部卒業のあと2年から5年勉強をします。そしてそれは学部と同じくらい学費がかかります。私の息子はリベラル・アーツの大学を4年間で卒業して、いま法科大学院に行き始めました。これは卒業までに3年かかりますが、その学費は年間40,000ドル以上になります。学部とあわせて7年間の学費と働いて得られたはずの7年間の収入を機会費用として失います。教育は高価な制度なのです。

グローバル化の時代にリベラル・アーツが重要である理由

我々は技術的な知識が重要になってきている世界に生きてはいますが、技術的な知識は専門化し、またすぐにその知識は時代遅れになります。知識を得ることは良いことではありますが、リベラル・アーツの卒業生は知識をどのように手に入れるか、そしてその知識をどのように処理していくかを学ぶことができると信じています。バランスのとれた世界観をもつことのみが、自分たちの社会と他の人たちの社会を理解しているリーダーたちを作り出すことができると信じています。そのような世界観を持つことは必須です。私は現在のアメリカの大統領が良いリーダーの好例であると言っているわけではありません。ブッシュ大統領はイエール大学でリベラル・アーツ

ツの教育をうけましたし、ハーバード大学で MBA を取得しましたが、世界について何も学んでいないように見えます。私はオバマ氏に希望を抱いています。かれはコロンビア大学の国際関係学部でリベラル・アーツを学び、ハーバード大学で法学の学位をとりました。

今日、世界は強く結びついています。そのため国際的な理解は必須です。その流れから国際研究の複合的な研究プログラムについてすこしお話しします。私はヴァッサー大学で国際研究のプログラムを創設する手助けをし、この 20 年ほどそこの主任を務めています。

このプログラムでは実にリベラル教育の目的の多くを実現してきたと感じています。つまり専門課程の履修については制限を設け、状況にあった演習と学生の選択を達成したということです。各学生は伝統的な学問の 2 つに関しては上級レベルでなければなりません。その学問とは経済学と社会科学、地理学と文化人類学、フランス文学と歴史、という組み合わせです。しかし組み合わせは多く、また流動的で生物学や生物化学のように環境科学に関心のある学生は多様な科目を組み合わせています。このような学生の選択については、多領域推進委員会によってガイドラインが決められています。海外研究や外国語の習得は必須であり、学習のプロセスは論文によって締めくくられ、この学生が選択した 2 つの主要な各門分野の橋渡しをするものであります。学生の興味は成熟して、さらに変化していくので、教育は学生の関心を変更可能にする絶え間ないアドバイスの過程といえます。

今日の財政的に貧しい環境の中でこのようなプログラムを組むことはたいへん費用がかかることが難点です。このような教育プログラムに欠かせないのがチーム教育、個々の学生へのアドバイスと少人数のセミナーです。このためには今われわれが要求している価格でもすでに高すぎるかもしれません。しかしプログラムは学生が卒業した後も高く評価されています。最近、このプログラムを修了した学生の満足度を調べるアンケート調査を行いました。たった 1 通の電子メールに対して 50%以上の人から返信があり、1 名を除く全員がリベラル・アーツのプログラムにたいして「よかった」と回答しました。1 人だけ「よくなかった」と答えた卒業生は「多くの分野について知っているが、深く知っている、という満足感が不足している」、と感じていました。知識の広さと深さの両立が難しいという問題は、リベラル・アーツがいつも直面しなければならないものです。この卒業生は、現在ジョージ・ブッシュの演説を書いています。

リベラル・アーツ校に対するプレッシャー

私はリベラル・アーツのモデルは最高であるという自信はありますが、様々なプレッシャーに直面しており、各校は異なった方法でプレッシャーに立ち向かっています。

すべての学校は同じではなく異なった挑戦をうけています。

1. 指導上の奨学金 (Disciplinary scholarship)

今日の若い研究者は小さな町にずっと住み続け、教育(teaching)に携わることを以前ほど望まない傾向があります。国際会議や研究費を受け取ることに魅力を感じていて、研究成果を出すことを求められています。ということは学生を教育することに対して仕事というより、むしろ苦痛に思う研究者もいるということです。このような気持は研究、特に理論と方法(theory and technique)に集中しているときに感じます。特に PhD を出す大きな大学院のあるところでは、学生を教えるということが魅力的なキャリアとしてみなされない傾向が出ています(もちろん他の職業に比べれば仕事時間はかなり少ないと思いますが)。研究者の義務感では 1 つの専門分野に対して強くなっている傾向があり、リベラル・アーツが目指す学問分野の統合という方向には向いていません。

2. 就職前の学生からのプレッシャー (Student pressure for pre-professionalism)

リベラル・アーツ校を出た学生のほとんどは大学院に進みません。経済学の学生の多くは好んでビジネスやコンサルティングの仕事に就きます。ただし、少なくともこのところのニューヨーク・シティーの経済危機の前までですが。産業界のリーダーたちはリベラル・アーツ教育の利点に賛辞をおくっています。そしてリベラル・アーツ教育の、未来のリーダーを産み出すという役割にも賛辞をおくっています。特にリベラル・アーツ教育を受けた学生は最も優秀で世界的視野を持っていると評価しています。しかし実務レベルの仕事は、低いランクにある直属の上司が評価することが多く、またそのような上司は働く人を金融と財務会計ソフトの腕前で評価してしまうことが多いものです。学生はこのことを知っていて科目名に金融とついている科目を履修しようとしますし、学部もそのような名前の科目を提供しなければならないというプレッシャーを受けます。親たちが年間 48,000 ドルも払っているのですから親が大学に意見を言う権利もあります。

3. 教育機関に対する財政的なプレッシャー (Financial pressure on institutions)

リベラル・アーツ教育をきちんとやろうとすると 2 つの点で高価なものになります。1 つには個別の学生に対する注意やアドバイス、少人数のクラスが必要で、同じ空間に居住して行うのが最高です。そのようなことはすべて現代世界では費用のかかる高価なものです。またもう 1 つには、我々はこれまで大学教育に触れる機会がなかった人々に対して、大学教育を経験できる機会を増やしていく義務があります。たとえば海外の学生、少数民族の学生、および労働者階層の学生たちです。このようなことに加えて、アメリカのリベラル・アーツ校の殆どは創立から 130 年から 200 年経っており、大学の建物を維持するのが難しくなっています。ヴァッサー大学の建物の多くは 19 世紀後半から 20 世紀初頭に建てられました。ことわざにありますが、「新しい建物を修理するより、古い建物を直すほうが費用がかかる」といことです。ヴァッサー大学は他の大学と同様に建物修理の延期の状況に直面しています。

4.より広い社会コスト (Broader societal costs)

他の教育制度よりもリベラル・アーツのしくみが大きくなればなるほど、多くの学生が、より長い期間、大学で学びます。そのため社会の支払う教育コストは高くなります。

5.入学者数の減少 (Falling potential student numbers)

2009年にはアメリカの人口の最も多い年齢階層は17歳から18歳と予測されています。戦後のベビーブーマーの人たちの子どもたち、つまり私の世代が生んだ子どもたち世代の人口は2009年以降は減っていくということです。これは大学にとっては顧客を得ることが難しくなるということになり、学費を下げて学生数を維持するということになるでしょう。

男女の学生数のバランスを取るのが難しくなりますね。男性は女性よりリベラル・アーツを選択しませんし、女性より勉強しませんね。

このようなプレッシャーの結果として、われわれはなすべき点は適応するように努め、断固反対しなければならないところでは反対しなくてはならなくなります。このリベラル・アーツ教育は未来の世代に残していかなければならないモデルだと私は信じています。その理由は1つには、このリベラル・アーツ教育をすれば個人が自分の優れた点を見つけることができるからです。またもうひとつの理由は、リベラル・アーツ教育をすることによって、ある問題が生じた時、広い思考能力、情報に対する思考能力をもった個人や指導者を育てることが可能になるからです。リベラル・アーツ教育をすることで、この世界はグローバル化と21世紀のなかを生き残ることができるでしょう。